

特集 DDR文学研究

DDR文学特集にあたって

DDR文学研究会 代表 山 根 宏

今から10年前の1983年の春、ぼくはベルリンのフンボルト大学でドイツ人学生に日本語を教えるかたわら、専門とする戦後文学の短期集中ゼミナールに参加していた。あるとき、ゼミナール担当の女性講師を自宅に招待したところ、手土産として一冊の本をもってきてくれた。名前も聞いたことのない若い作家の小説であったが、薦められるままに読みはじめてたちまちひきこまれてしまった。ベルリンでの半年余りの生活の中でぼくが感じていたDDRに特有の空気―ある種のよそよそしさ、あるいは寒々とした感じ―をその若い作家は過不足なく描き出していた。それまでDDRの文学といえば退屈な教化文学と思いこんでいたぼくには、このクリストフ・ハインの“Der fremde Freund”（邦訳『龍の血を浴びて』同学社刊）は大きな驚きであり、これをきっかけにぼくの研究分野の中にDDRの文学も入ってきた。

ドイツ統一によってDDRの消滅がきまった後、「DDR文学研究会」の発足を同僚に呼びかけたところ他大学からの賛同者も得られ、91年4月から始めることができた。4月―7月と9月―1月の間、月に1度を原則としてこれまで13回の研究会をもっている。来年度もこのペースで続けた後、94年度にはなんらかの形で研究成果をまとめたいと考えているが、このたび「DDR文学研究会」の特集を組んで頂くことができたので、その一端を紹介させていただくことにする。これを機にDDR文学への関心が高まれば望外の喜びである。

研究会日誌

第1回研究会（1991年5月31日）

「研究会をすすめるにあたって」

第2回研究会（1991年6月26日）

藤井 啓司「Christa Wolfをめぐる論争について」

第3回研究会（1991年7月3日）

「Christa Wolfの *Was bleibt* をめぐって」

第4回研究会（1991年9月28日）

Jaqueline BERNDT「Christa Wolfの *Kein Ort. Nirgends* について」

第5回研究会（1991年10月25日）

森川進一郎「Volker Braunのエッセイ：*Rimbaud. Ein Psalm der Aktualität* について」

第6回研究会（1991年11月29日）

山根 宏「Christoph Heinの *Der Tangospieler* について」

第7回研究会（1992年1月31日）

辻 善夫「Franz Fühmannの Novelle について－*Böhmen am Meer* を中心に」

第8回研究会（1992年4月24日）

温井 信正「Günter Görlichの *Unbequeme Liebe* について」

第9回研究会（1992年4月24日）

宇佐美幸彦「Jan Faktorと Bert Papenfuß-Gorekの詩作について」

第10回研究会（1992年7月3日）

市川 明「Heiner Müllerの *Die Hamletmaschine* について」

第11回研究会（1992年11月14日）

藤井 啓司「Monika Maron の *Flugasche* について」

第12回研究会（1992年12月12日）

森川進一郎「Volker Braun の *Berichte von Hinze und Kunze* について」

第13回研究会（1993年1月23日）

石井芙桑雄「Gerhard Wolf の *Der arme Hölderlin* について」